帰還兵士の苦難
――フィッツジェラルドの「メイ・デー」再読――

野　間　正　二

戦場を経験した者が、精神的に変調をきたし、その後ふつうの日常生活を送るのを困難になることは昔から知られていた。第一次世界大戦（1914～18）では、戦場で精神に変調きたした症状をシェルショック（shell shock）と呼んだ。すでに開戦から約半年後の1915年２月には、英国の権威ある医学雑誌『ランセット（*The Lancet*）』にシェルショックという言葉が記事のタイトルとして使われている（Binneveld 85）。その後もシェルショックの症状を示す兵士の数は増えつづけた。そのこともあり、英語圏ではシェルショックという言葉は専門家以外にも広まった。

たとえば1918年には、米国人のオニール（Eugene O'Neill）が一幕芝居『シェルショック（*Shell Shock*）』を書いている。場面は1918年９月のニューヨーク。この芝居では、シェルショックに罹って帰還していたアーノルド（Arnold）少佐が、シェルショックに苦しむ帰還兵士たちを治療するために米国に戻っていた軍医ウェイン（Wayne）と出会い、ウェインの適切なアドバイスで、シェルショックを克服する過程が描かれている。その過程で、次の２つのことが明らかになっている。まず、1918年９月にはすでに、米国の帰還兵士のなかにはシェルショックに苦しむ人間がいて、軍隊がその治療のために努力していたこと。次に、どのような猛者でさえも「たいてい突然シェルショックになる」（661）と軍医のウェインが説明しているように、戦場では誰もがシェルショックに罹る可能性があることが専門家には認められていたことだ。

芝居の『シェルショック』では、ウェインの適切なアドバイスで、アーノルドはシェルショックをすぐに克服している。しかし現実には、シェルショック

を治癒するのはなかなか難しかった。そのことは、1919年に、米国政府はウイスコンシン州ウォーキショ（Waukesha）に、シェルショックや類似の症状を示す帰還兵士のために、300床ある治療施設を民間から買収しているだけでなく、1921年には、もうひとつ同様の治療施設を、メリーランド州ペリービル（Perryville）に建設している（*Times* August 21, 1921）ことからも明らかだ。

そしてシェルショックに罹った兵士（＝除隊になった元兵士をも含む。以降同様。）は自殺することもあった。1921年に書かれたヘイデン（Hayden）大佐の告白手記のなかでは、休戦から2年以内に、シェルショックに苦しむ4人もの友人の兵士が自殺している（747）。おそらくシェルショックに罹った兵士たちの自殺という深刻な事態が頻発したからこそ、1919年という早い段階で、政府もその対策として専門病院を設立したと思われる。

さらにシェルショックの兵士の自殺には、大きな特徴がある。それは突発的で、謎めいている点だ。たとえば、1921年8月31日のニューヨークタイムズ紙の記事によると、8月30日、36歳の退役軍人であるヤング（Joseph Young）少佐が、正午過ぎに、ニューヨークのホテルを出ようとしたときに、とつぜん「ちょっと失礼（Excuse me.）」と言って脇により、38口径の拳銃で自殺を図った。弾丸は頭を貫通してこめかみから抜けていた。

ヤング夫妻は、友人夫婦と、8月29日にホテルのスイートに部屋をとり、29日の夜には4人で芝居を観にいっている。そして30日の朝には、ヤング氏は「気分良好（fair spirits）」な状態で姿を現しているし、また昼前には、市内に住む母親が訪ねてきて会っている。

ヤング氏の拳銃自殺は、まわりの誰にとっても、予期せぬ突然の出来事だった。その意味では、謎の自殺だった。しかし新聞は、ヤング氏が第一次世界大戦に従軍し、最近までシェルショックに苦しんでいたことを報じている。つまり1921年8月の時点ですでに、シェルショックに苦しむ帰還兵士がとつぜん謎めいた自殺を図ることが知られていたことが分かる。

I

作家フィッツジェラルド（F. Scott Fitzgerald）もかなり早い時期からシェルショックに関心をもっていた。というのは「バーニス断髪する（“Bernice Bobs Her Hair”）」という短編を1919年には書いている（Bruccoli: *Epic* 63）からだ。その短編のなかでは、軽薄な若い娘の軽薄さを象徴的に表すために、その娘が「こんにちわ、シェルショックさん！（Hello, Shell Shock!）」（39）と、青年に無邪気に話しかける場面が描かれている。シェルショックに罹った帰還兵士の心身の深刻な苦しみに思いを致すことなく、たんなる流行の言葉（風俗）と解して、「シェルショック」を気軽に使っている娘への批判は明らかだ。同時に、そうした若い娘の出現を許している社会の雰囲気、つまりシェルショックをたんなる流行語としてとらえて、シェルショックに苦しむ兵士を共感的に理解しようとしない社会一般への作家フィッツジェラルドの批判的な眼は明らかである。

フィッツジェラルドのこうしたシェルショックへの関心と視点から、読みかえすと興味ぶかい作品がある。それは1920年の初頭に書かれ７月に出版された（Tuttleton 181）中編「メイ・デー（“May Day”）」だ。

この作品は、短編集『ジャズ・エイジ（*Tales of the Jazz Age*）』（1922年）にも収められている。そしてその短編集の序文で、フィッツジェラルド自身が、この短編が1919年春のニューヨークで起こった「３つの出来事」（6）を描いていて、その春の「世間の興奮状態」（6）を背景にしているとコメントしている。そのこともあって、これまで「メイ・デー」は、ジャズ・エイジが始まろうとする1919年春のニューヨークの社会風俗を、醜悪な面をふくめてリアリスティックに描いた作品と見なされることが多かった。

もう少し具体的にこれまでの研究を検討してみる。マッツェーラ（Mazzella）は、登場人物たちの性格、登場人物たちの行動、内容と形式、この作品のプロローグと本文、貧困と奢侈、上流階級の若者と下層階級の貧しい若者などにおいて、対称性／対照性を際だたせた特徴のある技巧的な作品であることを指摘

している（379-85）。ジャーヴィ（Gervais）は、この作品に、社会主義の正義に憧れる気持ちと、資本主義が支えている上流階級の洗練された美意識に憧れる気持ちとにひき裂かれている作者フィッツジェラルドのアンビヴァレントな立場を読みとっている（170-73）。ルールストン（Roulston）は、この作品がメンケン（H. L. Menchen）の影響を受けていることを指摘し、この作品の３つの小話が調和的に統一されていないのは、作者がとうじの新しい芸術の潮流を受けいれようとした意図的なものであると見なし、またフィッツジェラルドは、登場人物たちに部分的に自分自身の姿を投影しているが、登場人物たちに嫌悪感を抱いていて、全体にわたってニヒリズムの影が認められることを指摘した（207-15）。タトルトン（Tuttleton）は、この作品が米国社会の緊張と分裂とを描いているが、その緊張と分裂は作家自身の心の緊張と分裂とシンクロしていて、そこにはフィッツジェラルドの社会主義への親近感やメンケンの影響を見いだせることを指摘した（184-86）。ボーマン（Baughman）は、「コロンブスに象徴される新世界の夢から現代のアメリカ人がすっかり堕落してしまっていることを暗示している」（65）作品だとする。マーティン（Martin）は、この作品には、男と男のホモセクシャルな関係の葛藤と緊張とが描かれていることを指摘している（99-101）。また上西は、この作品を、世界が拡散している歴史の転換点で、その現実をどう認識し、どう表現するかに苦悩している主人公の姿を描いた作品（21-22）と見なしている。さらに内田は、この作品が、米国の国家としてのアイデンティティーの危機とフィッツジェラルドをふくめた米国人の個人のアイデンティティーの危機を描いていて、それを克服する策は見つけられていないことを語りながらも、希望と新生を暗示している（26-30）としている。このように、さまざまな解釈がなされている。しかしシェルショックの観点から、この作品を解釈した研究や批評をわたしはこれまで寡聞にして知らない。

II

「メイ・デー」は、おもに３つのエピソードからなっている。帰還兵士が暴

徒となって左翼系の新聞社を襲撃した事件と、有名大学同窓会主催の派手で豪華なパーティとその後の乱痴気騒ぎと、帰還兵士の孤独な自殺とである。そしてこれら３つのエピソードは、作者フィッツジェラルドも「序文」で述べているように、実際にニューヨークで起きた「３つの出来事」にインスピレーションを受けて生まれたのは確かだろう。

というのは、1919年５月１日、メーデーを祝うためにニューヨーク市内の各地で開かれていた労働者や社会主義者の集会やコンサートに、多数の兵士たちが押しかけて、集会やコンサートを暴力的に妨害しようとし、同日午後４時頃には、約400人の兵士が、左翼系の日刊紙『コール（*The Call*）』の新しい事務所に押しかけて、事務所を荒らした事件（West 504-05; *Times May* 2, 1919）が実際に起きているからである。この事件は、この作品中の帰還兵士キー（Carrol Key）とローズ（Gus Rose）との物語にほぼそのまま組みこまれている。

だとするならば、残りの２つの出来事の内の１つは、作品中に描かれているような、エリート大学同窓会主催のダンスパーティがニューヨークで開催され、その参加者たちが、その後羽目を外して騒いだ出来事だったと思われる。そして最後の１つは、作中のゴードン（Gordon Sterrett）の自殺にインスピレーションをあたえた帰還兵士の自殺だったと思われる。

さて、「メイ・デー」は、ゴードンのビルトモア（Biltmore）ホテルへの登場ではじまり、ゴードンの自殺の場面で終わっている。またゴードンは、プロローグと全部で11のセクションとから成っているこの作品において、６つのセクションに登場していて、他のどの登場人物よりも多くのセクションに登場している。だからゴードンは主人公と言えるだろう。

その主人公のゴードンが、作品の最後では、唐突に拳銃自殺する。この唐突な自殺のインパクトは強くて謎めいている。だからこの作品を率直に読めば、この作品では「なぜ自殺したのかという」ゴードン自殺の謎が、この作品の「研究の主要な論点とされてきた」（上西 21）のもうなずける。

では、ゴードンはどのような人物として描かれているのだろうか。24歳のゴードンは、名門のイェール大学の卒業生で、第一次世界大戦から1919年２

月にアメリカに帰還したばかりである。大学時代には、ゴードンは絵画に才能を発揮するような芸術家肌の学生だった。またゴードンは、「世話を焼いてやりたくなるような弱さや、守ってやりたくなるような頼りなさ」(114) を、年下の女友達イーディス (Edith Bradin) ですらも感じてしまうような学生だった。そして、その評判の美しい女性イーディスにも好意をもたれるような学生だった。ベスト・ドレッサーだと認められるような学生でもあった。

しかし第一次世界大戦を経験してアメリカに 2 月に帰還してからは、そのエリート大学出身の前途洋々たる若者の運命が暗転した。復員してから約 1 カ月後、故郷ハリスバーグからニューヨークに仕事を探しに出てきて、輸出関係の会社に仕事を見つけた。しかしそれから 2 カ月もたたない 4 月末日にそこを馘首された。その 2 カ月弱の間は、陸続として復員してくる兵士を迎えて連日連夜パーティに出かけていたと、ゴードン自身が語っている。さらに貧困家庭の出で孤児になっていた女ジュエル (Jewel Hudson) と出会い深い仲になり、つきまとわれて、そのうえ現金200ドルまでも要求されている。復員後にニューヨークに出てきてからのゴードンの生活は、パーティと酒と女の日々だった。だから会社も馘首されたし、「経済的にも道徳的にも破産状態」(102) になっているのだ。

現在、つまり1919年 5 月 1 日のゴードンは、友人のディーン (Philip Dean) に「不安と貧困と眠れぬ夜」(102) に苦しんでいると告白せざるをえない状況にいる。さらに、「ぼくはかんぜんにバラバラになっちまった。へたばっているんだ」(100) とか「半分気が狂っているんだ、[……] もし君がニューヨークに来るのが分かっていなければ、自殺していたと思うんだ」(101) とも語っている。そして実際、ディーンにその苦境を語った日の翌日には自殺している。また、借金を申し込んだとき、ディーンから色よい返事をもらえないと、怒りの声を抑えるのにベッドの縁をつよく握りしめなければならなかった。それだけでなく、怒りで頭はクラクラし割れるようで、口は渇き苦い味がする (103) のだった。感情の抑制が効かなくなっているのだ。そのうえ、服装は垢じみていて擦りきれている。

ところで現在、戦場でのストレスから生じた心身の異常を考えるうえで、最

も有効な概念はPTSD（外傷性ストレス障害）である。そして診断の手引き書によるPTSDの診断の症状とゴードンのふるまいとは一致するものが多い。たとえば、まず、戦場を経験していて、「死や死の恐怖に直面していた」（American Psychiatric 218）のは確かだ。また、ゴードンは自殺の誘惑を語っていて、定宿の一室で一人きりで拳銃自殺する。そのゴードンが、PTSDの診断基準である「他人から孤立しているとか疎外されているとかという感覚」（*ibid* 220）をもっていて、「未来を思い描けないと感じている」（*ibid* 220）のは確かである。さらに、ゴードンは「不安と貧困と眠れぬ夜」を過ごしていて、怒りをふくむ感情の抑制がきかなくなっている。これらのゴードンの症状は、PTSD診断基準の症状である「眠れない」（*ibid* 220）や「怒りが爆発する」（*ibid* 220）と一致している。そしてゴードンは、生きていること自体が「限界状態に」（103）あると語っている。この状況も、「社会的や職業的な場や他の活動の場において臨床的に見て著しい苦悩や悪化を引きおこしている」（*ibid* 220）という診断基準に合致している。これらの事実だけでも、ゴードンは、現在なら、PTSDの患者と診断されたと思われる。

さらにつけ加えるなら、帰還後わずか3カ月たらずで、エリート大学の人気者の大学生だったゴードンが、哀れを誘うほどのひどい有様で、疲れきっており、両目は血走っているだけでなくキョロキョロと無意味に空転していて、手も震えている。この症状を、ルールストンはアルコール中毒の結果（213）としている。だが、アルコール中毒は原因ではない。結果なのだ。現在では共通認識となっているように、戦場でのストレスから生じた精神的な苦悩が、過度の飲酒をふくむ異常な生活習慣や自殺願望を生み、その結果として身体の異常やふるまいの異常となって現れているのだ（*Wartorn*）。ゴードン自身も「この4カ月間、わたしの内部では何かがプツンと切れつづけているのです［……］ほんとうにだんだんと気が狂いはじめているのです」（118）と告白しているように、除隊する約2カ月前から、彼の精神の崩壊はすでに始まっていたのだ。さらに、ベトナム戦争からの帰還兵の約15%がPTSDと診断された（Hart 97）ことや、イラクとアフガニスタンの戦争では兵士の20%から30%にあたる「帰還兵士が精神的に傷ついた」（Finkel 11）ことや、そして戦場

には不向きの芸術家肌の繊細で気弱な人間だったことや、唐突に謎めいた自殺をすることを考慮するなら、ゴードンは現在ならばPTSDの患者として、PTSDと診断される症状に苦しんでいたのは確かである。

しかし1919年の段階では、もちろんPTSDという病名はなかった。そもそもPTSDという病名はベトナム戦争（1960?-75）以降に生まれたものだ。1970年代前半になると、ベトナム戦争からの帰還兵士たちの社会への不適応、つまり失業、薬物やアルコール中毒、離婚、反社会的行動、奇行、自殺などが、アメリカのメディアによってさかんに取りあげられるようになった（Dean 59-60）。社会が、帰還兵士たちの心の問題と、彼らの救済とに関心を向けはじめたのだ。そして社会にうまく適応できない帰還兵士を救済しようとする政治的な動きのなかで、PTSDという病名が発明された。帰還兵士たちの問題行動が、その因果関係をちょくせつ証明できないが、戦場を経験したことから生じたストレスが原因であると初めて認めたのだ（Young 5; Herman 32）。1980年のことだった。

つまり第一次世界大戦で心の傷ついた状態はシェルショックと呼ばれていたが、正式に認知された病名ではなかった。シェルショックは病名ではなく、症状を示す一般的な呼び名に過ぎなかったのだ。だからシェルショックの患者は、臆病者、意志薄弱者、社会生活不適応者、作病者などと見なされがちだった（Herman 21）。シェルショックに苦しむ帰還兵士が自殺に至っても、それは一般的には「原因不明」の謎の自殺として扱われがちだった。そしてそれはふつうの反応だったと思われる。実際のところ、日本においては、現在でも、戦場から帰還した兵士が自殺しても、公式には「原因不明」の謎めいた自殺として扱われているのが実状だ。というのは、2004年から2006年の間に陸上自衛隊員約5500人がイラクの「非戦闘地域」に派遣され、その内19名が2005年度から2011年度の間に自殺しているが、防衛省は「派遣との因果関係は分からない」（『京都新聞』）と公表しているからだ。自殺した自衛隊員は、謎の死をとげたのだ。

さて、帰還兵士ゴードンも、知人からは意志薄弱な人生の落伍者と見られていた。学友で友人のディーンですらも、「現実を直視して」お金を手に入れる

ために「働くこと」をアドバイスするのみである（102）。また、親しかった女友達イーディスも、ゴードンが「この 4 カ月間、わたしの内部では何かがプツンと切れつづけているのです［……］ほんとうにだんだんと気が狂いはじめているのです」と助けを求めて訴えても、「こんなあなたの姿を見るのは残念だわ」（119）と言って去ってゆく。

周囲の人間はだれも、戦場で心が傷ついたゴードンの苦しみを理解しない。国のために戦った若者が、その愛国的な行為が原因で心の失調に苦しんでいるのを理解しようとはしない。そればかりかジュエルのように、ゴードンの心の失調につけ込んで、ゴードンを利用しようとする人間まであらわれる。

しかしとうじのゴードンの周辺の人間を責めるのは間違っている。周辺の人間はふつうの反応をしているにすぎない。ふつうの反応なのは、PTSD という病名が発明されるまでの経緯を考えれば明らかだ。また、「メイ・デー」の批評史からも明らかだ。たとえば、スクラー（Sklar）は「ゴードンはもって生まれた弱さの犠牲者であるにすぎないのであって、彼の貧困は彼の堕落の原因ではなく、結果である」（88）ときびしく断定している。また、タトルトンも「ゴードンの崩壊と自殺は、実利的で凡俗な米国や金を巻き上げようとする女が原因というよりも、むしろ道徳的な意志をみずから麻痺させた結果である」（184）と主張している。

愛国的な気持ちから戦場で戦った若者が、戦場で心に傷を負って帰国して、社会にうまく適応できなくなったとしても、その帰還兵士に人びとは関心も同情も払わない。実際、先のヘイデン大佐も、人びとの無関心と冷淡な態度そのものがシェルショックに苦しむ兵士を追いつめることを告白している（748-49）。そればかりかジュエルのように、心が傷ついた帰還兵士をちょくせつ追いつめさえする。

そんな戦後のアメリカ社会にたいする違和感を、ゴードンを主人公にすることで、作者フィッツジェラルドは、この作品で描こうとしたのは間違いない。また同時に、新聞社襲撃事件とエリート大学のダンスパーティの騒ぎとに埋没してしまって、世間の注目を集めることのなかった帰還兵士ゴードンの惨めで孤独な自殺を描くことで、戦争で心を病んだ帰還兵士が世間の冷淡な無関心の

なかで孤独に死んでいる現実を読者に訴えたかったのだ。そしてその孤独な死を、謎めいた死として一般化して解決済みの事件と見なし、その死の原因となった兵士の悩みや苦しみをそれ以上知ろうとしない世間にたいする違和感を、ゴードンの死を謎めいたものとして描くことで作者はあらわしている。つまりゴードンの謎めいた死は、帰還兵士の孤独な死の内実を知ろうとせずに、たんに謎めいた死として済ませている世間にたいする批判を込めて、作者によって意図的に謎めいたものとして描かれているのだ。

III

主人公ゴードンに次いで多く登場するのが帰還兵士のローズである。ローズとローズと思われる人物とは、５つのセクションに登場する。そしてこの作品では、ローズとキーとはいわば一対の人物として描かれている。２人は同時に３つのセクションに、ローズとローズと思われる兵士は１人で２つのセクションに登場する。

キーとローズとは社会の底辺出身の下級兵士である。米国に復員して軍隊から放り出されて３日しかならないのに、２人合わせても５ドル以下の所持金しかない。ニューヨークの不潔な街中で過ごし、すでにノミやシラミにたかられていて、寒さと飢えに苦しんでいる。また、私服も買えずに、軍服姿のままである。貧しくて友人もいない２人には行く当ても働き先もない。３日前に、突然あたえられた自由に戸惑って、刺激や面白そうなものを求めて、ニューヨークの街中をほっつき歩くより仕方がないのだ。

その彷徨のさなか、２人は、反戦演説をしている弁士を、ある兵士が殴りたおすのを目撃する。そしてその兵士を中心にした群衆に合流して、社会主義者たちの集会を襲撃しようと集会場に向かう。しかし会場までの歩く距離が長いのが分かると、２人はその隊列から離れる。２人の性格が良くわかる。それからキーの兄が働いている伝統ある高級レストラン・デルモニコ（Delmonico’s）に向かい、兄にただ酒をねだる。また、そのレストランでは、イェール大学のパーティのために用意されていた酒をくすねて飲むだけでなく、二人を見つけ

たイェール大学の学生ピーター（Peter Himmel）からも酒を恵んでもらう。その後、ふたたび街中に出た2人は、左翼系の新聞社を襲撃しようとしているおもに兵士からなる群衆にたまたま出会う。すると、その群衆に加わり、新聞社を襲う。

新聞社にはイーディスと社員であるイーディスの兄ともう一人の社員しかいなかったから、乱入した兵士たちによって、社内は破壊され、イーディスの兄は脚の骨を折られる。ところがその騒乱のさなかに、キーは自分自身の不注意からたまたま開いていた2階の窓から偶然に転落して死亡する。まったく無意味で無駄な死だった。ローズの方は、その混乱した場所からどうにか逃げだして、終夜営業のレストランにゆき、客を観察していた。そこでは、ピーターが相棒とパーティ後の乱痴気騒ぎを起こしていた。そこで、第9セクションが終わる。この第9セクションで、ローズの描写も表面的には終わる。

しかし読者は、5月2日朝9時のビルトモアホテルのロビーの場面を描いた第10セクションで、もう一度ローズのことを思い起こすことになる。というのは、このセクションで、イーディスは、たまたまロビーで見かけた一人の兵士を、兄の新聞社を襲って、兄の脚の骨を折った犯人だと断定するからだ。名指しにされた兵士は、イーディスの取り巻きや同じ上流階級の男たちに殴りたおされ、袋叩きにされる。

この不運な兵士は、第10クションでは終始、a short dark soldier（138）; a short, dark soldier（140）; the soldier（140）; the short dark soldier（140）と語られている。「背が低く色黒」だったと語られているのだ。また、その背が低い色黒の兵士は、ピーターと相棒の姿を路上で見かけたとき、「話しかけたそうに近づきかけたが、二人がすぐに一瞬誰なんだという視線をむけたので、[……] 二人をやり過ごした。」（138）と語られている。つまり、その背の低い色黒の兵士は、ピーターを見知っていたと考えられる。そして第3セクションでは、ローズは、相棒のキーよりも背が低くて「色黒（swart）」（106）だったと語られている。さらに第8セクションでは、あきらかにローズと思われる兵士が The short dark one（130）と語られている。

だから、たいていの読者は第10セクションの背の低い色黒の兵士のことを

ローズと解して読んでいると思われる。実際、タトルトンは、その背の低い色黒の兵士がローズで、ローズは逮捕されたのだと断定している（194）。しかし作者自身はその不運な兵士とローズとが同一人物だとも、逮捕されたとも明言していない。先に述べたように、第10セクションでは、終始背の低い色黒の兵士とのみ語られて、ローズとは一度も語られていない。この事実が重要だ。なぜなら、その直前の第９セクションのローズが描かれる場面では、ローズは、背の低い色黒の兵士と呼ばれることは一度もなく、Gus　Rose（132）; Rose（132）; Rose（132）; Rose（132）; Rose（133）; Rose's（133）; Rose（133）と、必要以上の頻度でローズと呼ばれているからだ。作者は、第10セクションではローズと思われる兵士を「背の低い色黒の兵士」という呼び方だけを意識的にしているのだ。

それはなぜか。そのことを考える前に、まず、イーディスから兄の脚を折った犯人された「とても顔色がわるく疲れた」（138）背の低い色黒の兵士は、ほんとうに犯人なのだろうか、という点を考えてみよう。その背の低い色黒の兵士が、ローズだとすれば、そのローズは作中の他の場面では気の弱い臆病な男として描かれている。新聞社内での混乱のなかで、編集者を選びだして、彼の脚を折るという暴力をふるうには似つかわしくない男なのだ。そんな機転のきく暴力的な男としては、ローズは描かれていない。だとすれば、イーディスがローズと思われる兵士を、兄の脚を折った犯人として指さしたのは、新聞社に乱入してきた暴徒のなかに、ローズの顔があったのを見ていたからだ（130）。暴徒の一人として、ローズの顔を憶えていたというのが実状だと思われる。それにもかかわらず、ローズはイーディスの兄の脚を折った犯人とされている。ローズは、濡れ衣を着せられて、周りの人間から袋叩きにあっているのだ。ローズは、ピーターの後をつけていて、たまたま入りこんだホテルのロビーで、たまたまイーディスに見つけられ、たまたま兄への暴行犯人とされ、周りの連中から袋叩きにあっている。

ローズの今後の生活が、気まぐれで過酷な運命に支配される惨めな苦しいものであることを、作者は暗示している。それは、キーがたまたま開いていた窓から偶然に転落し、無意味で無駄な死をとげる運命とも重なるものだ。また、

語り手が二人を紹介した冒頭で、「二人は見捨てられた無用なもの（drift-wood）として死に追いやられるだろう」（106）と予言したとおりの生き方をしているとも言える。

さて、そのローズと思われる兵士を、語り手は第10セクションでは、ローズと呼ばずに、なぜ背の低い色黒の兵士とのみ呼ぶのだろうか。それは、ローズやキーのような下級の帰還兵士一般の運命を作者が暗示したかったからだと思われる。多くの復員した下級兵士を待ちうける過酷で不条理な運命を暗示したかったからだと思われる。そのことは、あきらかに同一人物と思われる兵士を、第10セクションで a short dark soldier（138）と a short, dark soldier（140）と、2度にわたって不定冠詞をもちいて表現していることからも推察できる。

軍隊からポイ捨てにされ、お金もなく寄る辺もなく街中をさ迷わざるをえないキーやローズのような下級兵士にたいする作者の同情的な視線はあきらかだ。カンタベリー（Canterbery）も、別の作品「駱駝の背（“The Camel’s Back”）」の解釈のなかではあるが、作家フィッツジェラルドが労働者階級（下層階級）にたいして同情（sympathies）をもっていたと語っている（57）。しかしカンタベリーも述べているように、彼らを全面的に信頼していたわけではない（57）。たとえば、下級兵士を中心にした群衆は、兵士のことを考えて反戦を訴えている弁士を「ボルシェヴィキ」（108）だとののしるだけでなく、問答無用に殴りたおし、殴る蹴るの暴行を加える。そんな兵士の姿を描いているからだ。政府によって戦場に送られ、用済みになるとポイ捨てされる兵士たちに同情し自覚をうながしている反戦の弁士や左翼系の新聞社を、兵士たちは暴力で粉砕し沈黙させている。ほんらい共闘すべき相手を、暴力で蹂躙しているのだ。下級兵士たちの無知と粗暴さが冷静に語られている。この作品が、自然主義的な作品だと見なされる（Baughman 119; Bruccoli: “Preface” 97）ひとつの由縁だろう。

しかし全体としてみれば、先にも述べたように、復員してすぐにポイ捨てされる下級兵士にたいする語り手の同情的な視線はあきらかだ。言いかえれば、キーとローズを描くことで、作者は下級帰還兵士一般の苦難を描いていると言

える。また、エリートの帰還兵士ゴードンと同様に、下級帰還兵士キーとローズも、周りの人間の無関心と冷淡な態度によって、ますますその苦難と苦悩を深めている。

ところで、その２人と関係する５つのセクションとゴードンが登場する６つのセクションとを合わせると、１つのセクションが重複しているが、全11のセクションのうちの10のセクションを占めている。であるならば、この作品は、全11のセクションのうち10のセクションで帰還兵士ゴードンと帰還兵士キーとローズの苦難が描かれているから、帰還兵士一般の苦難を描いた作品だと考えてよいだろう。

Ⅳ

この作品では帰還兵士一般の苦難が描かれているとするなら、４つのセクションで描かれている豪華なパーティとその後の乱痴気騒ぎは、とうじの「世間の興奮状態」を切り取った描写という従来の解釈とは違った意味を読みとることができる。エリート大学の学生や卒業生たちが、戦後の解放感と好景気とのなかで、ジャズ・エイジを象徴するような華やかなダンスパーティと軽薄な大騒ぎをする姿とを描いている（Roulston 212; Tuttleton 186）と解しただけではすまなくなる。そして、そのときに参考になるのが、プロローグの存在である。

プロローグでは、人びとが、音楽隊を先頭に隊列を組んでブロードウェイを行進する凱旋兵士たちを熱烈に歓迎している姿が語られている。ときには花を投げいれて歓迎する。しかし、そうした歓迎パレードのお祭り騒ぎは、たとえ繰りかえされるとしても、一過性のものにすぎない。その場かぎりのものなのだ。しかも隊列を組んで行進している凱旋パレードだけを歓迎しているにすぎない。兵士一人ひとりを歓迎しているわけではないのだ。そのことが、物語の展開のなかで、はっきりとわかる仕掛けになっている。

ニューヨークの街中は、キーやローズと同じような、仕事もお金もない軍服姿の兵士であふれている。そしてニューヨークは「兵士たちにかんぜんにうん

ざりしていた」(104) と、語り手は解説している。また、ニューヨークでは、「兵士に強い酒を売るのを禁じる」(107) 法律が制定されていたことをも、語り手はあえて語っている。酒に酔った兵士たちのふるまいに、ニューヨーク市民は我慢ならなかったのだ。1919年とうじ、華々しい凱旋パレードは繰りかえされている。しかし、市内にあふれていた兵士たち一人ひとりは社会のクズだと見なされ、忌み嫌われていた。帰還兵士たち向けられたこのような人びとの矛盾した態度を、語り手は語っている。

プロローグでも、凱旋兵士を歓迎する人びとは、実は、歓迎を口実にニューヨークに出てきて、ニューヨークでの飲み食いや買い物や娯楽のような個人の欲望を満たすための機会ととらえて、それを貪欲に利用しているのだと解説されている。たとえば、彼らの異常なまでの購買欲に、「ああ！上靴はもう売り切れた！　ああ！　装身具ももう売り切れた!　どうしたらよいのか分からない、神様お助けを！」(98) と、嬉しい悲鳴をあげている商店主を喜劇的に誇張して描いている。

また、語り手は、凱旋パレードの様子を、「毎日毎日、歩兵たちはブロードウェイを陽気に行軍し、全員が気持ちを高ぶらせている。なぜなら帰還した若者たちは純粋で勇敢、紅顔皓歯で、そして故郷の娘たちは処女で顔も姿も見目うるわしいからだ」(98) と解説している。しかし、本文に登場しているすべての兵士たちは「純粋で勇敢、紅顔皓歯」とはまったく逆の兵士たちだ。ゴードンもキーもローズも疲れはて垢じみている。また、故郷の娘たちも、たとえばゴードンを脅迫しているジュエルのような、「処女で顔も姿も見目うるわしい」からほど遠い娘の姿が描かれている。語り手は、現実の帰還兵士や故郷にいる娘たちの実態を知ったうえで、先の引用のような理念化（理想化）された兵士や娘を語っている。凱旋行軍する兵士とそれを熱烈に歓迎する人びとにあきらかに皮肉な眼をむけ、その皮肉を誇張で強調している。もちろんその皮肉な眼は、凱旋兵士よりも歓迎する人びとの方により強く向けられているのを忘れてはいけない。

そこで描かれている凱旋行進する兵士の理念化された姿と、個人の欲望を狂気じみたまでに追求している人びとの姿とには、あきらかなコントラストがあ

る。そしてそのコントラストは、双方の特徴を際立たせる役割を果たしている。とりわけ、凱旋兵士を歓迎している人びとの個人的な欲望をひたすら追求している浅ましい姿が鮮明になっている。

コントラストが生みだすこれと同じような効果をねらって、４つのセクションでエリート大学同窓会主催のパーティとその後の乱痴気騒ぎが描かれていると考える。プロローグで描かれている帰還兵士一人ひとりに目を向けることなく、歓迎を口実にひたすら自分の個人的な欲望を追求している人びとと、本文で描かれている豪華なパーティをしてその後乱痴気騒ぎするイェール大学の学生や卒業生との間には共通したものが見いだせるからだ。

その５月１日のフル編成のバンドつきの「戦後最高」（104）の豪華なパーティは日付をまたいで続き、その後の乱痴気騒ぎは翌朝までも続く。1918年11月11日の休戦から６カ月もたたない時期で、戦場からは今も兵士が陸続として復員していて、街中には忌み嫌われている復員兵があふれている。そんななか、恵まれたエリートたちは、まるで戦争などなかったかのように、戦前から続く豪華なレストランで復古的なパーティ（上西　21－22）を開催する。そしてその後、酔っぱらって乱痴気騒ぎをする。そこで描かれている世界は、現実世界から隔絶した別世界だ。ゴードン自身が「この場所全体が、わたしには夢のようだ（like a dream）、ここデルモニコは」（118）と思わず語るように、現実世界から隔絶した夢のような別世界なのだ。凱旋兵士たちを遠くから歓迎しながら、自分たちは飲み食いや買い物や娯楽などの個人的な欲望をひたすら追求していた人びとの世界と同じ現実から隔絶した別世界だ。凱旋兵士たちを歓迎する人びとも、豪華なパーティに加わってその後乱痴気騒ぎをする人びとも、両者とも、自分たちの特権的な世界に自足して、浮かれ騒いでいる。両者とも、目の前にいる帰還兵士のきびしい現実と彼らの苦しみを見ようとしていない。それだけでなく、エリートたちのパーティとその後の乱痴気騒ぎも、誇張され皮肉な眼で描かれている。語り手は、プロローグで凱旋兵士を歓迎する人びとに向けたのと同じ視線を、パーティとその後の乱痴気騒ぎに向けている。

であるならば、恵まれたエリートたちが催すこの豪華な派手なパーティとそ

の後の乱痴気騒ぎは、彼らとまったく対照的な世界に生きている帰還兵士たちの苦難を際立たせるために描かれていると考えられる。語り手が距離をとって、その戦後最高で復古的なパーティとその後の乱痴気騒ぎを冷静で皮肉な眼で眺めているのも、帰還兵士の苦しみに満ちた現実世界を、その対照性ゆえに際立たせるためだったと考えられる。

V

中編「メイ・デー」は、主人公ゴードンの話と、その脇役のキーとローズにまつわる話と、５月祭の女王と思われるイーディスを中心にしたダンスパーティに関連する話との３つの話から成りたっている。その３つの話のそれぞれは、登場人物たちはお互いに交差するが、一見すれば「無関係な話」（Roulston 212）のように思える。しかし３つの話は、登場人物たちがお互いに交差することによって、復員した兵士の苦難というテーマにおいて関連している。

作者フィッツジェラルドは、戦場ではなく戦後の個人のつらさや苦しみに関心をもっていた（Meredith 165, 173）。だからフィッツジェラルドは、ゴードンを主人公に、キーとローズとを脇役に設定することで、外見的には無傷で帰還した兵士のかなにも、戦後の戦勝祝賀パレードに象徴される戦勝後の浮かれた社会のなかで、社会の冷淡な視線にさらされ孤立して、生きる意欲をもてないだけでなく、傷つき死ぬ兵士がいることを語っている。帰還兵士の苦悩と悲劇とを描いているのだ。それと同時に、イェール大学の豪華なパーティが象徴するような、帰還兵士にたいする社会の冷淡さをも描いている。これらの２つのことは、プロローグを語った後で、３つの話を11のセクションに分けた部分で混交させながら語り、登場人物たちが、その11のセクションを横断的に登場するという独特の作品構造で、効果的に表現されている。

＊尚、本稿は、龍谷大学で2016年７月２日に開催された日本 F. スコット・フィッツジェラルド協会全国大会で口頭発表したものに加筆修正したものである

引用文献

American Psychiatric Association. “Posttraumatic Stress Disorder.” *Diagnostic Criteria from DSM-IV-TR*. Arlington: Donnelley & Sons, 2004. 218-20.

Baughman, Judith S. and Matthew J. Bruccoli. *Literary Masters: F. Scott Fitzgerald*. Farmington Hills, MI: A Manly, 2000.

Binneveld, Hans. *From Shellshock to Combat Stress*. Amsterdam: Amsterdam UP, 1997.

Bruccoli, Matthew J. “Explanatory Preface.” in F. Scott Fitzgerald. *The Short Stories of F. Scott Fitzgerald*. Ed. Matthew J.Bruccoli. New York: Scribner’s 1989. 97.

Canterbery, E. Ray and Thomas D. Birch. *F. Scott Fitzgerald: Under the Influence*. St Paul, MN: Paragon House, 2006.

Dean, Eric T. “The Myth of the Troubled and Scorned Vietnam Veteran.” *Journal of American Studies* 26 (1992): 59-74.

Finkel, David. *Thank You for Your Service*. New York: Picador, 2013.

Fitzgerald, F. Scott. “Bernice Bobs Her Hair.” *The Short Stories of F. Scott Fitzgerald*. Ed. Matthew J. Bruccoli. New York: Scribner’s 1989. 25-47.

——. “May Day.” *The Short Stories of F. Scott Fitzgerald*. Ed. Matthew J. Bruccoli. New York: Scribner’s 1989. 97-141.

——. *Tales of the Jazz Age*. Ed. James L. West III. New York: Cambridge UP, 2002.

Gervais, Ronald J. “The Socialist and the Silk Stockings: Fitzgerald’s Double Allegiance.” *Modern Critical Views: F. Scott Fitzgerald*. Ed. Harold Bloom. New York: Chelsea House, 1985. 176-180.

Hart II, Ashley B. *An Operators Manual for Combat PTSD*. Lincoln: Writer’s Showcase, 2000.

Hayden, Herbert B. “Shell-Shocked — And After.” *The Atlantic Monthly*, December 1921. 738-49. Web. 10 May 2016.

Herman, Judith. *Trauma and Recovery*. New York: Basic Books, 1992.

Martin, Robert K. “Sexual and Group Relationship in ‘May Day’: Fear and Longing.” *Studies in Short Fiction* 15-1 (Winter 1978): 99-101.

Mazzella, Anthony J. “The Tension of Opposites in Fitzgerald’s ‘May Day’.” *Studies in Short Fiction* 14-4 (Fall 1977): 379-85.

Meredith, James H. “Fitzgerald and War.” *A Historical Guide to F. Scott Fitzgerald*. Oxford: Oxford UP, 2004. 163-213.

The New York Times. “Soldiers and Sailors Break up Meetings.” May 2, 1919. Web. 10 May 2016.

——. “‘War’ Nerve Cases Difficult to Treat.” August 21, 1921. Web. 10 May 2016.

——. “Shell-Shocked Major Tries Suicide in Hotel.” August 31, 1921. Web. 10 May 2016.

O’Neill, Eugene. *Eugene O’Neill: Complete Plays 1913–1920*. New York: Library of America, 1988.

Roulston, Robert. “Fitzgerald’s ‘May Day’: The Uses of Irresponsibility.” *Modern Fiction Studies* 34–2 (Summer 1988): 207–15.

Sklar, Robert. *F. Scott Fitzgerald: The Last Laocoon*. New York: Oxford UP, 1967.

Tuttleton, W. James. “Seeing Slightly Red: Fitzgerald’s ‘May Day’.” *The Short Stories of F. Scott Fitzgerald: New approaches in Criticism*. Ed. Jackson R. Bryer. Madison: U of Wisconsin P, 1982. 181–97.

West III, James L. “Explanatory Note.” in F. Scott Fitzgerald. *Tales of the Jazz Age*. Ed. James L. West III. New York: Cambridge UP, 2002. 499–528.

Young, Allan. *The Harmony of Illusions: Inventing Post-Traumatic Stress Disorder*. Princeton: Princeton UP, 1995.

Wartorn: 1861–2010. Dir. Jon Alpert and Ellen Goosenberg Kent. HBO, 2011. DVD.

上西哲雄 「“May Day” とその時代」『英語青年』1996年10月号 20－22.

内田勉 「F. Scott Fitzgerald の “May Day” について」『電気通信大学紀要』10巻１号（1997年）22－29.

『京都新聞』「イラク派遣の25人自殺」（2012年９月27日夕刊）